

# 国際おきなわ

KOKUSAI OKINAWA

2016  
No.61

## CONTENTS

- 第34回 外国人による日本語弁論大会
- 国際理解協力事業 高校生の主張コンクール／中学生の作文コンテスト
- 寄稿①「平成 28 年度 災害時外国人支援サポーター事業を振り返って」
- 寄稿②「沖縄県の在住外国人の医療機関受診の現状と課題」
- 寄稿③「医療通訳ボランティアの現場から」
- ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業／沖縄県国際交流員等学校派遣事業
- 寄稿④「加深多元文化間的相互理解、齐心共建和平美好家园」  
「多文化間の相互理解を深め、共に平和で魅力的な地域づくりを行う」（抄訳）
- 外国語絵本読み聞かせ教室／日本語読み書き教室



ウチナーネットワーク大合宿 於：国立沖縄青少年交流の家(渡嘉敷島)



公益財団法人  
沖縄県国際交流・人材育成財団

OKINAWA INTERNATIONAL EXCHANGE & HUMAN  
RESOURCES DEVELOPMENT FOUNDATION

## 第34回「外国人による日本語弁論大会」

去る2月11日(土)にパレット市民劇場において「第34回外国人による日本語弁論大会」を開催いたしました。本大会は、県内に在住する外国人に、国際交流、国際親善、相互理解、沖縄・日本文化等について日本語で意見を発表する機会を提供し、異文化理解と共生の精神及び国際社会のあり方をともに考え、相互友好の一助とすることを目的に実施しており、昭和58年度から毎年開催し、今回で34回目を迎えました。

今年は、県内の大学、専門学校等から35名(12カ国)の応募があり、一次審査(書類選考)を経た12名(8カ国)が本大会に出場しました。本大会では多くの観客を前に、それぞれの弁士が、沖縄に来て感じたことやカルチャーショックを受けたこと、家族やふるさとに対する想い、沖縄の歴史、文化や自然に対する考えなどを日本語で語り、身振り手振り、自作のポスターを交えながら多彩な弁論を展開しました。

厳正な審査の結果、沖縄県知事賞は、演題「マブヤー、マブヤー、ウーティクーヨー」を弁論したアメリカ出身のサマンサ・アケミ・マエサトさんが受賞しました。沖縄県系四世にあたるサマンサさんは、「自分のご先祖さまのことをより深く理解したいというきっかけで、ウチナーグチを学び始めた。しかし、今はそのウチナーグチが消滅しつつあると聞き、とても残念に思う」と、ふるさとへの思いを熱弁されました。その熱弁は多くの観客を魅了し、弁論中にも大きな拍手が時折沸き起こっていました。

今回は、例年以上に弁論のレベルが高く、審査委員からも、いずれの弁論の内容も甲乙つけ難いと好評が述べられ、弁士のレベルの高さを評価されていました。弁士の皆さま、ご共催・ご後援・ご協賛くださいました団体の皆さま、また、ご来場の県民の皆さまに深く感謝申し上げます。



記念撮影

### ●●● 第34回大会入賞者 ●●●

賞	名前	演題	国	団体名
沖縄県知事賞	サマンサ アケミ マエサト	マブヤー、マブヤー、 ウーティクーヨー	アメリカ	琉球大学
沖縄県国際交流・人材 育成財団 理事長賞	オダヴァル ゾルザヤ	生活の中の日本語	モンゴル	日本文化経済学院
沖縄テレビ賞	李 秀熙 (イ スヒ)	ハーイヤッ!	韓 国	琉球大学
琉球新報賞	許 有玎 (ホ ユジョン)	上を向いて歩こう	韓 国	琉球大学
審査員特別賞	陳 曉菲 (チン ギョウヒ)	この空は一つ	中 国	琉球大学

演題

## マブヤーマブヤーウーティクーヨー

琉球大学 サマンサ・アケミ・マエサト(米国)



はいたい、ぐすよー、ちゅーうがなびら。我真栄里サマンサ明美やいびーん。

ハワイからチャーびたしが、ウチナーンチュぬ4世やいびーん。

私のひいおじいさん、ひいおばあさんは、勝連平敷屋の真栄里武善と前兼堅かめ、浦添屋富祖の山城山戸と西原うし、浦添城間の津波せいたと津波うし、具志川兼箇段の島袋かまろうと横田うと、この8人です。110年以上前にこの8人が沖縄を離れてハワイに渡りました。残念なことに、私はこの8人に会ったことがありません。沖縄のことや家族のこと、沖縄を離れてどんな気もちだったか、どんな苦勞をしたのか、知りたいことが、たくさん、たくさんあるのに、天国に行ってしまった今では、聞くことができません。ですから私は自分のルーツである沖縄のことが知りたくて、留学に来ました。

私が初めて沖縄の地を踏んだのは、11歳の時でした。沖縄のことを何一つ、知らなかったせに、飛行機を降りたとたん、故郷に帰ってきたような不思議な感覚を覚えました。それ以来、私は絶対沖縄で勉強しようと決めて目標にしていたのです。実は沖縄に来る前に東京の大学で勉強していましたが、日系人とはいえ、冷たくよそ者扱いされ、仲間に入れない感じでした。でも沖縄では「ウチナーンチュ4世」の私でも、大歓迎して快く受け入れてくれます。心に垣根はありません。「ウチナー」にルーツあれば、世界のどこにいても、「いちやりばちよーでー」、ウチナーンチュとして温かく輪の中にいれてくれる「チムグクル」が感じられます。

去年の10月に開催された世界のウチナーンチュ大会。世界中にいるウチナーンチュが大集合。特にこの大会のフィナーレでは、みんなみーんな、つながっているんだあ、という一体感を味わい、感動で胸がいっぱいになりました。私に命をくれた人、2人。お父さんとお母さんに命をくれた人、4人。おじいちゃんとおばあちゃんに命をくれた人、8人。ひいおじいちゃんとおひいおばあちゃんに命をくれた人、16人。そのまた上に、32人。そんなふうにならぬ命のつながりで9世代前まで数えてみると、全部で1022名にもなります。その先祖のお陰で私がこの世に生まれたと考えると、感謝の気持ちで一杯になります。それだけでなくウチナーンチュみんなが絆で結ばれている、とウチナーンチュ大会で感じました。

そんな大好きな沖縄でご祖先様のことをより深く理解するためには、やはりウチナーグチを学びしかないとはい猛勉強しています。私のひいおじいさん達のハワイのお墓には、沖縄の本籍が刻まれています。きっと子孫に自分たちのルーツを伝えたい気持ちを込めて刻むことになったのでしょう。しかし、それは漢字で書かれていたので、

日本語を勉強するまで何が書かれているか読めませんでした。また私は小さい頃から墓参りをしてきましたが、実は英語でウートーしてしていました。そんな子孫のことを、アキサミヨーとっていたでしょう。英語ができなかったご先祖様には、私の気持ちは伝わっていなかったと思います。私がウチナーグチが話せるようになれば、きっとご先祖様は私の感謝の気持ちを理解してくれるにちがいない!この世に私を誕生させてくれた先祖の言葉、ウチナーグチを学ぶことは、私から祖先への恩返しの一つだ!それくらいしないといけない!と感じてがんばっています。

でもウチナーグチが今のままでは、消えてしまいそうだという現実を知り、とても残念に思っています。ウチナーグチにはほかの言葉にはない、世界観や価値観があります。先人の知恵もあります。「チムドンドン、ナンクルナイサー、ユイマール、ヤーナレールフカナーレー」、説明はできますが、フィーリングは訳せません。またウチナーンチュのアイデンティティーに強く根ざしているものです。もし、ウチナーグチを話せる人がいなくなったら、どうなってしまうでしょう。ウチナーグチでは魂のことを「マブイ」と言いますね。私からすると、特に沖縄の若い人達は、マブイを落とした「マブイとうし」の状態のように見えます。皆さんのマブイは、どこで落としてしまったのでしょうか。言葉は文化の一つ。ウチナーンチュの魂です。どうしてその言葉に興味がないのか、不思議です。沖縄の魂を失うことなく、受け継いでいくためにシマクトゥバ、ウチナーグチを大切にしてください。ハワイでハワイ語が復興されたように、今ならまだ間に合うと思います。今こそ、「マブヤー、マブヤー、ウーティクーヨー」

とマブイグミをして、抜け落ちた魂を拾ってください。魂を大切にすることは、ご先祖様を大切にすることです。「言葉忘しーねー、国忘しゅん。国忘しーねー、親忘しゅん。」言葉を忘れたら、故郷のことも忘れる。故郷を忘れたら、親のことも忘れる。つまり、自分の言葉と故郷を失うことは、自分のご先祖様のことを忘れることと同じです。そうなってはいけません。私たちのご先祖様に感謝と敬意を表すためにも、そして百年後、数百年後の子孫のためにも、祖先から受け継がれてきたウチナーグチを残しましょう。

我一スピーチ聴ちとうらさぬ、いっペーにふえーでーびたん。

我ん忘していん、「言葉忘しーねー、国忘しゅん。国忘しーねー、親忘しゅん。」ぬ言葉、くくるんかい、ぬくしみそーりよう。

## 国際理解協力事業

当財団では、中・高生の皆さんの国際理解を促進するため、東京の日本国際連合協会の協力を得て、中学生作文コンテスト、高校生の主張コンクール(弁論大会)を開催しています。高校生向けのテーマは、①「国連加盟60周年を迎える日本は、その強みを活かしながら、今後、国連の場をどのように活用していくべきか」②「昨今、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されたが、今後、日本と国際社会はどのようにしてアジェンダの実施に取り組むべきか」③「あなたが国連事務総長だったら、紛争に伴う人道問題をどのようにして解決するか」の3つが設定されました。

参加者はそれぞれ胸に秘めた情熱を堂々と落ち着きのある語り口で主張し、最優秀賞を受賞された県立球陽高等学校2年の比嘉ころろさんが、日本国連協会主催の中央大会に沖縄県代表として派遣されました。全国各地から集まった24名の弁士らが与えられたテーマについ

て熱弁を振るった中央大会において、比嘉さんは、自身の米国留学経験を元に感じたことについて弁論を行い、優秀賞(第2位)にあたる『(公社)日本ユネスコ協会連盟会長賞』を受賞しました。

中学生の作文コンテストでは、4校12名が応募した沖縄地方選考において琉球大学教育学部附属中学校2年裾分華子(すそわけ はなこ)さんの作文1編を選出して、中央大会へ送付しました。惜しくも入賞には至りませんでしたが、難易なテーマに対し、日々の生活での体験や考察から問題提起を行い、これからの国際社会の行方を担う若者として考えを述べられていた作品であったことが印象的です。

例年、沖縄県代表となる弁士、作文はいずれもレベルが高く、生徒・学生達の国際理解に対する関心の強さを感じさせられます。来年度も多くの生徒のみなさんので応募をお待ちしております。



高校生の主張コンクール沖縄県地方大会の様子

演題 「国連加盟60周年を迎える日本は、その強みを活かしながら、  
今後、国連の場をどのように活用していくべきか」

沖縄県立球陽高等学校 2年 比嘉 ころろ  
指導教諭：島袋 香代子



英語力の向上、そして広い視野の獲得を目標として挑戦したアメリカ留学。そこで私が感じたのは、「差別」の確かな存在でした。住人の9割近くを白人が占める、保守的な思想の強いその地域では、人種や宗教、性的指向といった面でマイノリティな人々が、職場や学校など様々な場所で不当に扱われている現状がありました。当時、TVでは白人警官が無抵抗の黒人を射殺したというニュースがひっきりなしに流れ、私自身アジア人である事を理由に馬鹿にされる事もありました。

急速に多様化する現代社会の中で、私たちは日々様々な「違い」に直面しています。私は居心地の良い日本を離れ初めてその事に気が付きました。異なる立場、それぞれの歴史を持ち色々な環境で育ってきた人間同士が真にわかり合う事など不可能ではないのかと考えた事もありましたが、理解できなくとも受け容れる事こそが重要なのだと感じました。他者と自分との「ずれ」を意識し、相手がどの様な視点から物を見ているのかを想像してみる。それこそが、国連の目指す平和な世界への実現へと向けて、国境や文化的な垣根を超えて取り組むための 第一歩となるのではないのでしょうか。

国連に日本が加入してから60年。日本は技術力や教育水準の高さという強みを生かし、今や先進国の仲間入りを果たしました。私は、その飛躍の根本にあるのは日本人の持つ「受容」の文化だと思っています。様々な国から異なる文化を取り入れて、それを更に独自に発展させてきた国、日本。立場や主観の違いによる対立が激しさを増す今、これからの世界をより良い方向に導いていく為に必要なもの。それは我々日本人の持つこの「自分と違う物を認め受容し、共に生きる」姿勢だと私は考えます。

私は10ヶ月間異なる文化の中で生活してみて初めて、多様性という言葉の本当の意味を理解できたように思います。我々は皆誰もが異なる種々のマイノリティであり、多様性は個人の中に存在しています。生まれた場所や肌の色や信仰の違いを基にしたジャッジではなく、「人と人」という最小単位での繋がりがこそ世界を救うのです。その繋がりの大切さ、そして日本の受容の文化をこれからの世界を担う次の世代へ伝えていく為にも、国連の果たす役割を子供たちに知って貰う事が重要だと考えま

す。初等中等教育における国際交流の機会の提供など、国連と教育との繋がりをより深める事でそのチャンスは更に増えていくでしょう。

国連の活動は多岐に渡り、地球規模の問題への解決に日々取り組んでいます。今回のコンクール参加にあたって国連について調べるうち、いつしか、私の中にあつた「差別のない世界を作りたい」という気持ちに「国連という場所で、日本人として」という思いが加わったのです。漠然としていた私の夢が明確な目標へと変わった瞬間でした。

日本の国連拠出額はアメリカに次いで二番目でありながら、現在の日本人職員数は望ましいとされる数のわずか三分の一程度となっています。現状、日本人の国連における発言力の弱さはよく指摘されています。「国連を自分事に」とは日本の国連加盟60周年を記念してUNICが掲げるモットーです。教育によって国連の活動をもっとよく知って貰う事で、例えば私のように「何かしたい」と思っている人に道標を示すという事、そして世界の平和の為に働く日本人の育成にも繋がると考えます。異質な物を受容し共存するという歴史・文化的な基盤を持ち、武力を否定しつつ人的・知的そして財的貢献を行ってきたという強みを持つ日本だからこそ、世界に発信できることがある。それは、「互いの違いを積極的に受容する事で、異なった視点から新たな価値を見出す事ができる」というものです。様々な要因により生じた摩擦で身動きの取れなくなっている世界に新しい形でアプローチ出来るのが日本だと思います。その舞台として、国連ほどふさわしい場所は他にありません。

この星では今日も、約73億個の奇跡が命を刻んでいます。しかし、その奇跡が全て平等なものとして扱われているかという、そうではない現状があります。私はこの現状を「仕様がなかったことだ」と放っておくことはしたくありません。See the world not as it is, but as it should be.「あるがままではなく、あるべき世界を見る。」この奇跡の星が、すべての人にとって生きやすい場所となる日が来るように。誰か偉い人達の仕事ではありません。他の誰でもない我々が、私達が、この手で引き寄せるのです。

## 平成28年度 災害時外国人支援サポーター事業を振り返って

(公財)沖縄県国際交流・人材育成財団  
理事長 山田 保



当財団では、沖縄県が平成21年3月に定めた「おきなわ多文化共生推進指針」の基本理念に則り、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、それぞれが共に地域社会を支える主体として、その能力を十分に発揮しながら、イチャリバチャオーデーの心で在住外国人も県民も安心して暮らせる「多文化共生社会のまちづくり」に寄与することを目指しているところです。

平成28年3月18日に、沖縄県と当財団は「災害時における外国人支援に関する協定」を締結いたしました。本協定は大規模災害発生の際に、当財団が外国人の被災状況及び避難場所での情報収集や、多言語による災害情報等の翻訳発信を行う事で、外国人がことばや文化の違いにより避難所で孤立することのない支援体制を整えることを目的としております。

本協定の締結に基づき、災害時の外国人支援体制の検証や支援サポーターの養成と派遣体制の確立などに取り組み、これまでに地域住民や在住外国人を対象に「災害時外国人支援サポーター養成講座」を実施しました。災害時に地域住民とともに避難所等において担い手となりうる人材の育成をするなど、これまでに離島地域を含め53名の支援サポーターを養成して参りました。

一方、当財団は沖縄県西海岸地区の海拔2メートルの場所に位置しているため、大規模な津波が発生した場合、外国人支援拠点としての機能を果たせないことが考えられます。このことから、JICA沖縄国際センター及び宜野湾市と協定を締結し、大規模災害発生の際には、津波による被害を受ける可能性が少なく、また一定のスペースを使用することができ、多言語支援センター等として一時使用することができる施設の確保にも取り組んで参りました。

### ■ 今後の展望

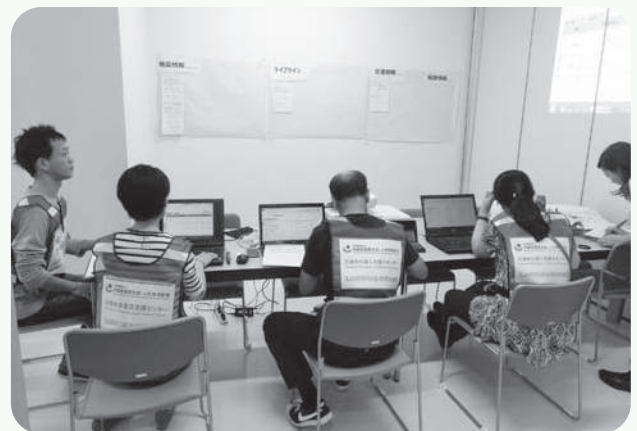
2011年3月に発生した東日本大震災や2016年4月の熊本地震など、大規模災害は今やどこで起きてもおかしくない状況となっております。沖縄県は島嶼環境であることから大規模災害が発生した際、しばらくの間、「自助」と「共助」でもってその場を凌がなければならないことが想定されます。

そこで今後も継続的に「災害時外国人支援サポーター養成講座」を実施することにより、地域住民の「防災や減災」に対する意識を啓発すると共に本島のみならず離島で支援サポーターを増やしていくことが重要である

と考えています。

また、クルーズ船の寄港や観光客数の増加等、インバウンド産業が好調に推移していることに加え、在住外国人数の増加など、本県は国際的な環境に置かれていることから、「在住外国人を支援サポーターとして育成」することも重要と考えております。地域の日本語学校や、世界中から多国籍の研究者を受け入れている沖縄科学技術大学院大学等で、在住外国人を対象とした出前講座を行う事により、「防災や減災」の啓発のみならず、発災時に地域住民と共に避難所運営を担う事のできる人材育成を目指して参りたいと考えています。

地域住民や在住外国人の人材育成と並行し、自治体や行政、消防・警察等の関係機関、また災害時に地域支援が可能なその他機関との合同による防災訓練やワークショップ等の実施により、平時から「ネットワークづくり」を図るとともに、協働・連携・役割体制の確認を図る取り組みも行って参ります。



避難所運営訓練の様子

# 沖縄県の在住外国人の医療機関受診の現状と課題

(公財)沖縄県国際交流・人材育成財団  
国際交流課 主任 葛 孝行

沖縄県では沖縄科学技術大学院の開学や、海外企業関係者による県内起業など、年々在住外国人の数が増加の傾向を見せ、今や109カ国、1万3千人余り\*の外国人が地域住民と共存をしている。一方、在住外国人を取り巻く課題として、主に「言葉の壁」「制度の壁」「こころの壁」の3つが挙げられる。言葉がわからずコミュニケーションに苦勞するため、納税者であるにも関わらず生活上必要な情報や社会保障、行政サービスを受用できていなかったり、また在住外国人のための制度整備が不十分な自治体も多く、公立学校での外国人児童や生徒のサポートが十分に行われていないところも少なくない。また、「ヘイトスピーチ」という言葉もあるように、異なる文化を持つ者に対する差別や偏見により、在住外国人と地域住民とのコミュニティーを形成するためには、課題が多い地域も多いとされている。

そのような背景から財団では、沖縄県が定める「おきなわ多文化共生推進指針」の基本理念に則り、在住外国人等との共生社会に向けた環境を整備し、医療機関等を受診する際のコミュニケーションに不安を抱える在住外国人のために、医療通訳ボランティアを養成し、登録及び紹介を行うことで、在住外国人が安心して医療機関を利用できる地域づくりを行っている。

具体的には、在住外国人が安心して地域医療にかかることができるよう、英語・中国語・スペイン語・韓国語のいずれかの言語で対応することができる「医療通訳ボランティア」を育成し、日本語を話すことができない外国人の通訳サポートを担うものである。講座は全7回で、1回あたり4時間(医療講義2時間と各言語によるロールプレイ2時間)からなり、全講座を無遅刻・無欠席で受講した方を、「医療通訳ボランティア」として認定している。現在118名が医療通訳ボランティアとして認定を受けており、主に県内の病院または診療所が行う健康診断や受診、入院手続き等基礎的な通訳業務を担っている。ボランティアなので無償で行うが、交通費については、依頼者より支払われる。

もともと在住外国人を対象として行われた本事業は、導入当初、医療通訳ボランティアの紹介件数も2011年度当初5件~8件で推移していたものが、少しずつ認知され、2016年度には62件となり、今年度の実績も70件程になると見込んでいる。紹介件数の増加に伴い、主に2点の課題に今後取り組む必要があると考えている。

1つめは、ボランティアを活用する医療機関及び自治

体の利用意識の啓発である。これまでのボランティアから提出された活動報告書を分析すると、事前の依頼内容と異なることを直接現地で依頼されたり、拘束時間が長時間に及ぶなど、ボランティアが大きな負担を被っている事例が多数発覚した。今後は医療通訳ボランティアの紹介を有償化したり、医療通訳ボランティアを活用する側の啓発活動にも取り組む等の改善策を講じる必要があると考える。

2つめは、外国人が重篤な状況に陥った場合、現在の仕組みでは、対応しきれないことである。本事業は在住外国人を対象としているが、外国人観光客数の増加に伴い、「緊急・重篤」を伴う案件に対するボランティア派遣の依頼を受けることも少なくない。日本全体でインバウンド数がアウトバウンド数を大幅に上回っている現状の中、在住・観光関係なく外国人に対応できる仕組み作りが大きな課題となっている。そのため今後は、重篤な状況に陥った外国人の医療通訳を担うことのできる「上級医療通訳者(医療通訳士)」の育成や、養成後の受け皿の確保、医療関係機関等との連携をさらに深めていく取り組みを行いたい。

\*参照:法務省ホームページ(平成28年6月現在)



医療通訳ボランティア ステップアップ講座の様子



ステップアップ講座 受講者のみなさん

# 医療通訳ボランティアの現場から

第5期医療通訳ボランティア  
上里 博美



定年退職後は“自由な時間をボランティア活動に”と漠然と想定していました。米国留学時代には、様々な場面で周りの米国人や多国籍からの留学生ボランティア精神に支えられ、無事に学業を修了し英語教師として育ててもらいました。その仕事を終えた後、今度は私が在住外国人へ“ご恩返し”をと考えていたのです。そんな時、新聞紙面で「医療通訳ボランティア養成講座」の案内が掲載されました。“医療通訳”という言葉の重みに不安とためらいを感じましたが、学んできた“英語”で社会貢献をと考え応募しました。

2015年6月から7月にかけ「医療通訳ボランティア養成講座」を受講しました。終了と同時に沖縄県国際交流・人材育成財団のボランティア登録を済ませ、不安と緊張を感じながら10月に初医療通訳ボランティアに臨みました。あれから約1年4ヶ月、通訳業務終了後に提出する「活動報告書」を振り返ってみると16件のボランティアを行ったこととなります。今回、これまでの体験を振り返り活動を通して感じたこと、学んだことをまとめてみたいと思います。

初めての医療通訳ボランティアは、恩納村保健福祉センターで乳児健康診断を受診する、中国国籍10ヶ月男子の保護者へのサポートでした。予習段階で長年愛用していた電子辞書が使用不能になるという予期外もあり、益々緊張感が高まりました。当日は、早めに現場に着き係の方から説明を受け、保護者に引き合わせてもらうと一やるべき事をきちんと誠意を持ってやるーと肝を据えました。日英で書かれた問診票、男子がむずかることもない、健康で体重過多以外に問題なし等の状況に助けられ、保健婦の問診、貧血検査、小児科医の診察、歯磨き指導と栄養相談と順調に進み、時に適切な英語表現に知恵をしぼりながら無我夢中でそれぞれの場面での問答や説明を英日に通訳しました。

各検査の順番待ちの間サポートする保護者に積極的に話しかけ、お互いを知り合い話しやすい関係を築けるよう心がけました。大学院を米国で修了したこと、将来は大学教授職が決まっていることなど、教育分野で話題を共有することができ会話はずみませんでした。ご両親で見えていたお二人とも朗らかで話やすく、母親も今は二人の子育てで手が一杯だが、将来は自分も学問を続けたいと、プライベートな事も話してくれ多くのことをお互いシェアできました。この雰囲気は私の緊張をほぐし、また子育てに関して彼らが気軽に質問できる環境作り役に役立ったと思います。全てを終え、お互い感謝の言葉でさよならと挨拶をした時は、上手くできたかは別にして、安堵感と充実感が一杯になりました。

その後、恩納村保健福祉センターでは、乳(幼)児歯科検診、集団健康診断(乳がん・子宮がん検診)(胃・肺・大腸がん)、大人の健康診断等に臨みました。また、南部医療センター(整形外科、耳鼻科、小児科(脳波検査含む))、中部病院(大腸関係で内科)、ちばな病院(肝臓関係で内科)等の病院での受診も対応しました。ボランティアに出かける前には、必ずその対象科や疾病について日英で予習しました。恩納村の場合は、前もって問診票、検診の流れ、受診の留意事項等を提供してくれましたのでそれらにしっかり目を通し、文言と発音の確認、音読をしました。さらにネットで関係する内容をチェックし予備知識を注入しました。病院で対応する場合は、依頼先機関から送られてきた経過、現状、診察の目的などを参考に、予習内容的を絞り予測をして書籍で調べたり、ネットで検索したり、体の部位を辞典でチェックしたりしました。予習で役立つのが、これまで受講してきた講座や研修で頂いた資料と学んだ内容です。それらを復讐することで受講した時の学びが思い起こされ精神安定剤となりました。

しかし、現実には想定(予習)通りにはいかないもの、簡単な日常表現か

ら専門用語まで英語表現に困ったり、単語自体が解らなかつたり、咄嗟に思いつかなかつたり、発音が伝わらなかつたり、学びたての医療専門用語での混乱があつたり、英語が聞き取れなかつたりと、戸惑い焦つたりする場面がありました。そんなときはできるだけ正確に伝わるようパラフレーズして表現したり、電子辞書を使用させてもらつたり、文字で書いたり、書いてもらつたりと誠意を持って対応しました。ボランティアをやるたびに能力不足に落ち込んだりもしますが、そのような状況で学習した単語や表現は、インパクトが強く学びの蓄積につながっています。歯磨き指導で“小刻みに歯ブラシを動かす(small, vibrating strokes)”、離乳食の説明で“冬瓜(the wax gourd-melon)”、貧血検査で“anemia”を言う時、ふと“leukemia”も思い浮かべたり、乳がん検査で“palpation(触診)”を“palpitation(動悸)”と混同し言い直したり、大腸内視鏡検査問診で“polyp”を“ポリープ”と発音して訂正したり、“前立腺がん(prostate cancer)”や“生体検査(biopsy)”を辞典でチェックしたり医師に教えて頂いたりするなど、そのような語彙や表現は、養成講座で玉那覇先生がおっしゃっていたように、ノートに整理して見返したりしています。

これまでの体験から「医療通訳」は、受診者(患者)を中心として医療スタッフと通訳者、三者の連携したコミュニケーションが大切だと認識します。通訳者として受信者や患者に寄り添い不安を取り除き、医療スタッフとの真摯で誠実な仲介者になる、医療スタッフが通訳言語に興味を示し協力的である、受信者や患者は両者にたいしてオープンである等の要素が絡み合うと安定し安心した環境で物事がはかどります。医療通訳ボランティアで2度同じ受信者や患者に対応するという偶然が重なった場合は、会話もスムーズで双方ともリラックスして臨めました。医師が医療専門用語を英語で伝えてくれたり、スペルアウトや筆記してくれたりした場合は、通訳は共同作業だと有り難く思いました。その他、医師が流暢な英語で診察をなさった時、患者さんと私は目を見合わせ微笑み、患者さんに安心感と信頼感が広がるのを感じました。その診察を側で聴いていた私は、患者さんの母親や祖母になったかのような気さえしました。

しかし、「医療通訳」で最も大切なことは“通訳の正確さ”だと実感します。受診者や患者の安心感、信頼感はもちろんの事、医師にとっても重要な要素だと思います。通訳者として、たとえボランティアの立場であろうと医療の現場に係わる者として、この点においては特に“プロ意識”で臨みたいと考えています。医療通訳ボランティアを経験するたび、日頃から語学の研鑽、医学知識の習得、積極的な研修受講や仲間との学習会を心がけ医療通訳のスキルアップにつなげたいとの思いを強くします。

医療通訳ボランティアを通して出会った人々の国籍は、中国、台湾、インド、エジプト、パレスチナ、ザンビア、ウクライナ、英国、アルゼンチン、米国と多国にわたりました。彼らとのおしゃべりを通して学んだ、彼らの人なり、国柄、その他色々な事柄は私自身の国際理解の一助となりグローバルな視野を広げてくれています。また、“英語”の持つ国際性を再認識しています。

こうして医療通訳ボランティア体験を振り返ると、毎回緊張しましたが、様々な事を学んできたなと思います。ボランティアという事で受信者や患者、依頼機関、看護師や技術者などの医療関係者から感謝の言葉を頂きますが、最も恩恵を受けているのはボランティアしている私自身であることを痛感しています。これからも機会のある限り英語を活かして、医療通訳やその他のボランティアに関わり、どの国籍の人々も協力して共生できる社会を目指す一端を担えたらと思います。



## 平成28年度ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業

ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業は、沖縄県からの委託を受けて沖縄から海外への移住者の子弟、沖縄県と関わりの深いアジア諸国等から留学生を受け入れ、帰国後の沖縄県と出身国の架け橋となる人材を育てることを目的として実施している事業です。

本年度は、8つの国と地域（アメリカ本土・ハワイ・ブラジル・ペルー・ボリビア・アルゼンチン・中国・台湾）から15名の留学生・研修生を受け入れ、県内各大学への留学はもちろん、伝統芸能である「三線製作」や、

県内企業で食品加工や流通などを学びました。

伊江村での沖縄の自然や生活を体験する「民泊研修」や、慰霊の日に平和について考える「平和学習」などをはじめ、出身国と沖縄との架け橋となるためにどうすれば良いかと考える様々な研修を行いました。

特に本年度は、「第6回世界のウチナーンチュ大会」もあり、留学生は県内各所で大活躍していました。

彼らは帰国後の出身国での活躍が期待される人材ばかり、彼らのこれからの活躍に期待です。

## 国際交流員等学校派遣事業

当財団では、国際交流員（CIR）等学校派遣事業として、昨年度より宮古・八重山諸島まで派遣範囲を広げ、これまでのべ235校の学校へ交流員を派遣してきました。今年度は離島派遣を含めた10校の小・中・特別支援学校での交流会を実施しました。

各国の交流員の体験・経験に基づく自国紹介や交流会は、子どもたちの真剣なまなざしと笑い声が溢れました。中でも、交流員の出身国の遊びや、○×ゲーム（国のクイズ）を行った際には、おおいに盛り上がりを見せていました。また、児童・生徒からはエイサーや歓迎の歌の披露、給食交流会等でもてなして頂き、国際交流の場作り

の契機となっております。派遣した何れの学校からも事業に対し高い評価を頂きました。児童・生徒からは、「将来、海外に行ってみたい!」「英語以外の言葉も勉強したい!」などの感想を頂きました。

※「国際交流員（CIR）」とは自治体国際化協会の実施する「外国青年招致事業（JETプログラム）」に参加する国際交流活動を行う方々です。普段は沖縄県庁で通訳・翻訳・国際交流業務などに従事するペルー、アメリカ、中国、韓国の交流員の協力を得て、県内の小学校・中学校・特別支援学校に国際理解・交流会を実施しました。



巨大折り紙作り



クイズによる文化紹介



給食交流会

## 《加深多元文化间的相互理解， 齐心共建和平美好家园》

车 莉莉



虽然国籍不同，长相各异，口音有别，但会说日语，和普通日本人一样生活的外国居民从古至今在冲绳并不少见。冲绳与日本其他地区相比，不仅风景美丽，环境优雅，更重要的是这里更具有宽容大度，尊重他人的良好社会风尚，加之最近冲绳经济趋势向好，人才市场需求扩大，海外的投资经营者，技术研究人员，国际人文行业人士，留学生等纷沓而至，也许不久的将来，无论是僻静封闭的乡村还是新建开发区，冲绳各地都可能迎来更多的外国居民。

人口增长，经济发展，社会稳定乃众人所望。但是，如果社区里增加的居民不是日本人而是文化背景各异的外国人，你将怎么相处？如何交往呢？有个日本朋友闲谈时说，自己居住的公寓里搬进一家外国人，他们使用共用设施的时候不合规矩，本想提醒一下，又不知怎么说，最后还是请物业出面，而物业也只是在公寓显眼的地方张贴通知而已。一来二去弄得很累。朋友说，她不知道以后怎么相处，希望行政部门能多给外国居民一些指导。其实，近几年来行政服务有了很大改善，对外国居民提供的公共服务范围也有所扩大，在各级政府办公设施中，一般都备有翻译成各种语言的生活指南手册和各种说明。但是，由于每个外国人生活习惯，语言程度，文化认同度，接受能力等存在差异，统一格式的服务不一定能达到统一效果。恐怕还需要采取一些弹性应对措施。同样是外国人，有的居住时间长，通晓日语，熟知日本习俗，有的则相反；有的所属某个企业，学校或团体，容易获得来自社会多方面的信息，而另一部分则可能缺乏这样的环境。行政部门可以针对不同情况组织社区中一些在日生活时间长，经验丰富，了解社区文化的外国居民与社区及行政部门协作，配合解决行政服务中顾及不到的问题，以促进外国居民主动入乡问俗，加速社区中多元文化间的互相接纳。外国居民对于共建家园并不消极。他们也同样期待快速融入所在社区，期待和日本居民一起共同

建设居住环境优美，治安良好，放心居住的家园，也希望参与当地的政治经济和文化生活，通过交流构筑互信关系，共同促进地区发展。有一个中国朋友说：为了让自己的孩子不忘母语，她正在教孩子中文，她希望社区里的小朋友也一起学习，这样既可以加深感情，又可以互相激励。如果能作为社区活动开展的话，她愿意提供爱心服务。另一个和我同住一个社区的外国朋友说，她多年来积极缴纳健保费，而且身体健康，很少生病，提议政府表彰她这样的居民。这样做会带动更多人关注健康。多元化社会有很多需要解决的问题，但多元文化也会带来更多的建设性意见，产生更多的思路。相信只要积极发挥多元文化的优势，共同面对，就有可能跨越障碍，实现共建和平美好家园的愿望。



车 莉莉氏による医療通訳ボランティア講座の様子

## 「多文化間の相互理解を深め、 共に平和で魅力的な地域づくりを行う」(抄訳)

車 莉莉

沖縄には昔から、国籍や顔、しゃべり方も異なる多くの外国人が日本語を理解し、暮らしている。他の日本の地域と比べても沖縄は自然が豊かで、環境も美しく、さらに他人に対しても寛容で、相手を尊重する社会風土は優れている。これに加え、最近、沖縄の経済状況は良くなっていて、人材需要も増大しているため、海外の投資者、経営者、技術研究員や国際業務従事者、留学生など、より多くの外国人が沖縄に集まってきている。これからは、新しい開発区だけでなく、人里離れた小さな村など沖縄の各地で外国人住民を迎えることになるだろう。

人口が増加することで経済は発展し、社会の活性化につながる。それは誰もが望んでいることであるけれど、しかし、増えるのが日本人ではなく、異なる文化を持つ外国人だったら、どう対応し、どう付き合っていけばいいのだろうか。ある日本人の友達は、住んでいるマンションに外国人家族が入居した時に、公共スペースの使い方に問題があると気づき、注意をしようと思った。けれど、どう伝えていいのかわからず、結局、管理会社に頼み、注意書きを貼ることしかできなかったそうだ。彼女はだんだんと疲れてきて、どうすればいいのかわからなくなってしまい、外国人住民に対しては、行政から指導できるようにしてほしいと、深刻そうに話していた。実は、ここ数年、行政の外国人住民への対応は積極的になり、サービスも良くなりつつある。多くの役場で、多言語に翻訳された生活のしおりや案内が用意されている。しかし、外国人によって生活習慣が異なり、日本語のレベルや理解力の個人差も大きく、一般的な対応が同じような効果を得られるとは限らないため、もっと柔軟で有効な対応を講じる必要がある。例えば、同じ外国人住民でも、在住歴が長く、日本の企業や学校などに所属している人たちは、社会や地域の情報に精通していて、日本社会にもよくなじめているが、その一方で、日本の環境になじみずにいる人たちもいる。役場や政府は、このような状況を把握したうえで、日本での生活経験が抱負かつ地域文化に精通している人物を中心に、外国人住民・地域・行政が協働する組織を構築し対応した方がいいと思う。そうすることで、外国人住民に対して、「郷に入っては郷に従う」という精神への理解を促すこともできるし、多文化間の相互受け容れを促進することもできると考えている。

外国人住民も、地域社会づくりには積極的である。彼らもまた、一日も早く地域になじみ、日本人住民と共に

安心・安全・快適に暮らせる町づくりをしたいと思っていて、居住地の政治経済や文化生活に参加し、交流を深め、双方の信頼関係を築き、共に地域づくりをしたいと考えている。ある中国人の友達は、自身の子どもが母国語を忘れないよう中国語を教えていて、できれば地域の子どもたちにも勉強に参加してほしいと言っていた。勉強を通して、みんなが仲良くなれるし、子どものモチベーションも上がるかもしれないと話していた。彼女は、もし地域活動の一環として行われるのであれば、ぜひ役に立ちたいそうだ。さらに、私と同じ地域に住んでいる外国人の友達は、長年、国保税をきちんと払っていて、健康でほとんど病院に行かないので、自分と同じような人達を政府が奨励した方が良いと考えていると言い、そうするとより一層、健康づくりに励む人も増えるだろうと語っていた。

多文化社会において解決すべき課題はたくさんあるが、しかし、その中でさまざまな建設的な意見や振興につながる多くのアイデアを生み出すこともできる。そのメリットを生かし、みんなで心合わせて向き合えば、障壁を乗り越え、平和で魅力的な地域を共につくることができると信じている。



## 外国語絵本読み聞かせ教室

本事業は、多文化共生社会推進の一環として、県内に暮らす外国人及び県民の親子を対象に外国語による絵本の読み聞かせを通して、様々な国の言葉や文化に親んでいただくことを目的に実施しております。前年度に引き続き、子どもたちの夏休み期間中に公民館や図書館を利用して読み聞かせを行いました。今年度初の試みとしては、11月に開催された“おきなわ国際・交流フェスティバル(JICA主催)”の「せかいのおはなし会」において当教室を実施しました。今年度の実施回数は全6回、読み聞かせの言語は英語・ポルトガル語・ベトナム語・タガログ語(フィリピン)・ドイツ語でした。延べ250名を超える参加者にご来場いただきました。本教室では、読み手の方の出身国の生活習慣や食文化に関する紹介やクイズも出題されるため、親子が一緒になって楽しみながら異文化に触れるきっかけができると、大変好評を得ており

ます。次年度はさらに多くの国を紹介できるような読み聞かせ教室を行っていきたいと思います。



外国語絵本読み聞かせ教室の様子

## 日本語読み書き教室

県系移住者子弟及び在住外国人の日本語習得を支援し、日常生活に必要な識字能力の養成を図り、地域への社会参加を促すため、日本語(漢字)の基礎的な読み書き学習の場を無償で提供しています。受講対象は、県内での就職や日常生活において日本語の識字能力の

習得を必要とする方です。小学1年生～6年生程度の漢字や、漢字を中心とした日常生活に必要な日本語の読み書きを中心に、毎週金曜日(夜 7:00～9:00)に実施しています。



日本語読み書き教室の様子



受講生同士の持ち寄りパーティー

## 平成29年4月1日～国際交流課の新ウェブサイト開設!

地域住民や在住外国人の皆様など、万人に親しみを与え、本県の多文化共生社会の推進や国際理解・協力事業のさらなる促進を目的に、当財団国際交流課のウェブサイトを開けることになりました。新しいウェブサイトのお披露目は4月1日を予定しておりますので、お楽しみに!!  
国際交流課新ウェブサイト《<http://kokusai.oihf.or.jp/>》



〈イメージ〉

国際おきなわ (No.61) 2017年3月発行 編集・発行／公益財団法人 沖縄県国際交流・人材育成財団  
ホームページ <http://kokusai.oihf.or.jp/> フェイスブック [www.facebook.com/oihf60](http://www.facebook.com/oihf60)  
〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐4丁目2番16号